

いま、漢文を学ぶことの意義

まつばら
あきら
松原 朗

(専修大学)

漢文を学ぶことにどのような意義があるのか。個々の漢文作品の魅力を語ることも大事だが、それに劣らず、漢文の教員が、漢文が日本語と日本文化に果たした役割の大きさを理解し自信を持つて授業に臨むことも大事である。

漢字に、音と訓の二つの読みがある。この当たり前のことが、実は異様な事態である。漢字は意味を持つので「字」にして「語」であるが、一般に、語が二つの発音を持つことはあり得ない。catやdogに、二つの読みがあると聞いたことはない。中国語の「猫」や「狗」は、「マオ mao」「ロウ lou」とただ一通りに読む。これが世界の平均値である。簡単にまとめれば、音は古く中国から伝来した中国語の発音、訓は日本語訳となる。ただ訓について注意すべきは、英語のcatに「ねこ」という訳語を当てるのと異なつて、「猫」の漢字そのものをじかに「ねこ」と読むことであろう。

日本人は英語を学び始めて百数十年、しかしcatという単語の音読みは「キャット」、訓読みは「ねこ」だと教わるこ

とはない。つまり英単語の受容は、漢字が音・訓という二つの手法を通じて完全に日本語に同化されたのとは次元が異なる。ここで韓国語の事情をみてみよう。韓国語では、漢字に音読み(韓国漢字音)はあるが、訓読みの習慣はない。ネコを意味する韓国の固有語はあるが、それは漢字「猫」と別個に存在する語であり、それが「猫」の漢字の読み(発音)となることはない。韓国の基本スタンスは、漢字をあくまでも外国の字(語)と見るものようだ。雑駁に言えば、日本における英単語の位置づけに近いのかもしれない。

前置きが長くなったが、ここからが本題である。漢字の「音」「訓」は、漢文については「音読」「訓読」とパラレルの関係となる。漢文の音読とは、中国語の発音によつて読み下すことであり、歴史的にはしばしば「直読」と呼ばれた。荻生徂徠がこの直読を提唱したことは有名である。これに對して「訓読」はどのように説明されるであろうか？ 先師の松浦友久先生は、「日本語の文語文への直訳」という平たい

説明を好んでいた。直訳とは、原文のニュアンスを足すことも引くこともない翻訳の意である。またその結果、訓読されたものは、読み手による翻訳の相違が最小化される。

「直訳」は翻訳の一体である。そして翻訳とは、元の言語を他の言語に移し替えることである。しかし今はこの「訓読は翻訳」という理解について、再考する必要があるように思う。確かに、訓読された漢文（書き下し文）は、中国人にとってはもはや外国語である。これは「猫 mao」という単語を「ねこ」と読んだとたんに中国語ではなくなるのと同断である。だがしかし、日本人の理解はそれとは異なる。そもそも「猫」は「ねこ」と読むのであり、そこに翻訳はない。この仕組みを漢文に応用するとどうなるか。訓読は翻訳ではなく、「漢文」のもう一つの読み方となる。それは一つの顔を、右から見たのと、左から見たときの関係のようであり、音読（直読）されたものが本物で、訓読されたものが「似セモノ」（翻訳）とはならない。漢文が訓読されたとき、私たちはほとんど漢文そのものを直覚して、それが翻訳であると認識していないということである。例えば、鈴木信太郎のマラルメの翻訳が如何に立派なものであっても、あくまでも翻訳であり、原文との間にあって隔靴搔痒の思いを免れないのとは事情が異なる。漢文と訓読されたものが一体であるというこのリアルな感覚の存在こそが、日本における漢文の特異

な受容法を雄弁に物語る。

東アジア世界では、漢文を自民族の固有語に置き換えるための「訓読現象」が広範に存在したことは、金文京氏の『漢文と東アジア―訓読の文化圏』（岩波新書、二〇一〇年）が明らかにした通りであろう。しかし日本以外の地域において、「訓読」は、漢文を理解するための便法であるに止まり、意味がわかればその都度弊履のように棄て去られて、訓読の文体はその言語体系の中で安定した文体へと成熟することにはなかった。しかし日本において訓読は、もはや姑息な便法ではなく、正式な日本語の文体となって、日本語を豊かなものとした。それは漢字が訓読みという手法の発明を通して、完全に日本語の一部になったのと同じことである。

「訓読は翻訳」とする見方は、わかりやすい理解の仕方である。しかしこの見方に留まる限り、畢竟、訓読を「英語の和訳」と同じ次元に留め置くことになる。日本語と日本文化を正しく理解するためには、訓読を翻訳と見るだけでは済まされない。漢字の読み方に、音と訓の二つがあるように、漢文の読み方には音読（直読）と訓読の二つがある。日本人は、漢字と漢文にそれぞれ訓読みと訓読を附与することに、中国語を外国語としてではなく、丸ごと日本語に取り込むことに成功した。このように考えたときに、初めて漢文を訓読を通して学ぶことの意義が明らかになるように思われる。

「古典探究」のねらいと古典の学習

西^{にし} 一夫^{かずお}
(信州大学)

■黒船来航―学習指導要領の大幅な改訂

今回の学習指導要領の改訂では、小学校・中学校では大きな枠組みの変更は行われていないと言ってよい。我が国の言語文化等に関わることで指摘すれば、「知識及び技能」(3)に関する指導事項Aが全て「親しむこと」に統一されたことと、小学校第一学年及び第二学年の「伝統的な言語文化」の指導事項に「イ 長く親しまれている言葉遊びを通して、言葉の豊かさに気づくこと」が新設された点が特筆できる。

かたや高等学校では科目の枠組みを大きく変更することとなり、これに伴って科目ごとに三領域の扱いに大きな変化が設けられた。また必修科目の名称が科目内容や学習活動を想起させるように変更された。

ただし、留意すべきなのは、それぞれの科目に託されている役割は学習指導要領とその解説を読めば明確で、資質・能力の育成に向けての教育課程を丁寧にとどめるように仕組まれている。また、科目変更は生徒の学習活動や授業形態の改

善を行う契機を与えられたのだと理解することで、国語科が担う今日的な教育課題について取り組む機会になるだろう。我々を取り巻く環境も急速に変化し、予測困難な時代を迎えており、持続可能な社会の構築が喫緊の課題である。一方で多様性を受け入れ、質的な豊かさによる新たな価値観を享受し、複雑な現代を生き抜ける人材育成が求められている。教育の根幹を担う言語の資質・能力を育成する国語科として、授業を通して生徒が身に付ける教育内容は何であるかを再考できる千載一遇の機会であろう。

■温故知新―新設科目「古典探究」

先に掲げた高等学校国語科の科目の多くは新たな科目名として位置付けられている。「古典探究」は他の科目とは異なり、「探究」という学習活動に関する事柄が科目名に含まれている。今回の改訂では他にも「探究」を付す科目名が目立ち、「総合的な探究の時間」も「学習」から変更になった。これは「主体的・対話的で深い学び」を実現するための学習

方法を明示している。

「古典探究」の科目の設置理由について解説（総説）では「ジャンルとしての古典を学習対象とし、古典を主体的に読み深めることを通して伝統と文化の基盤としての古典の重要性を理解し、自分と自分を取り巻く社会にとつての古典の意義や価値について探究する資質・能力の育成を重視」したと述べる。しかも「思考力・判断力・表現力」の指導事項は「読むこと」のみ、「知識及び技能」も①言葉の特徴や使い方に関する事項の一部と②情報の扱い方に関する事項とが設けられていない。とはいえ「読むこと」を中心とした学習活動が求められるものは、古典（古文・漢文）の訓詁註釈的な授業ばかりではないであろう。

高等学校の国語科が設定する目標の根幹は「生涯にわたる社会生活」に必要な国語の力や伝え合う力、さらには我が国の言語文化の担い手としての自覚と国語を尊重してその能力の向上を図る態度の育成にある。目標の実現において「古典探究」が果たす役割は「担い手」や「態度」の育成にあるのではなく、社会生活を営む上で基底となる資質・能力を育成するための古典の教育であると理解しなくてはならない。「古典探究」の科目の目標においても、論理的に考える力・共感したり想像したりする力・実社会で伝え合う力等を高めることを通して「自分の思いや考えを広げたり深めたりする

こと」（思考力、判断力、表現力）ができる資質・能力の育成が求められる。遙か彼方の先人たちの言葉に耳を傾け、それを自らの思考や生活の糧とできる価値付けが必要なのだろう。

探究的な学習を展開する際には「問い」を立てることが重要になる。学習活動のきっかけ作りとして、教科書の冒頭には「古典を探究①②」とし学習への導きと方法が視覚的な資料を伴って設けられており、教材を読むだけでなく「見ること」を契機に探究的な学習を促進できる。さらに「漢文の舞台」「諸子百家関係図」「漢文と日本文化」等の付録を活用することで生徒の学びを惹起するだろう。このような学習過程を経て自らの考える力や想像する力を育成することになる。

■用意周到―資質・能力の育成に必要なもの

漢文教材は、現行の学習指導要領の科目としては必修科目「国語総合」と選択科目「古典A」「古典B」とに棲み分けがなされてきた。今回改訂された学習指導要領では、目的に応じて「言語文化」「古典探究」を中心に教材として用いることが可能となっている。日本の言語文化としての漢文のあり方、日本文化との関わりを際立たせることが求められる。つまり、大陸文化をさまざまな形で受容した日本の漢字文化の有り様と、現代を生きる私たちの知見とを時空を超えて結びつけることが強調されている。このような観点で『古典探究 古典編・漢文編』『精選古典探究』の目次を見れば、述

べて来た事柄が随所に見受けられることに気づくであろう。単に「古典A」「古典B」の後継科目にとどまらない新たな古典の学習観や学習方法、さらには教材化が提案されており、いずれもが「探究」的な学びを誘発することになる。

まず、私たちが漢字で書記された書物や思想を自国の文化としてどのように内化してきたかをたどるという巨視的な観点がある。このような観点の導入として「漢文の窓」「豆知識」と題して組み込まれているコラムの活用がある。前者の「漢文と日本人」は、先人たちの思考や表現の基底に漢文が大きく影を落としている事実を、奈良時代の漢詩文や元号「令和」に関わる表現から、『白詩文集』の受容、さらには軍記物語などの和漢混交文を経て、夏目漱石、正岡子規に至るまで、さまざまに姿を変えながら、私たちの言語生活と関わらせてたどることができる。これは文学に関わる受容や内化という理解にとどまらず、近代化する日本が西洋の概念を漢語でもって新たな日本語として取り入れたり、既存の漢語に新たな意味を付与したりしたことも、漢文が日本語に深く関わっている証左となるだろう。このようなコラムの活用によって、工夫を凝らした単元や古文・漢文・現代文の教材が、学びの深化や「探究」の契機を生み出すことになる。

また、微視的な観点では韻文教材が挙げられる。和歌に詠まれる要素の多くは季節（四季）と恋情である一方、漢詩は、

自然・旅情・別離・憂愁というテーマが多い傾向にある。「詩歌」とまとめられることがありながら、古文・漢文の韻文の主題には異なる要素がある。そうした教材の主題性も「探究」的な学びの契機となりえる。教材（作品）の背後にある部分を示しながら学習活動を展開することは古典学習にとって見逃されているように思う。

教科書冒頭には「この教科書で学習するために」と題して活用方法が示されている。先に例示したコラムにとどまらず、「読み比べ」「視点」なども活用すれば、生徒の主體的な「探究」学習を誘発し、ひいては授業改善にもつながることになるだろう。一例を示せば、「文の形式と表現」は文学史的な視点から漢文を理解する上で積極的な活用が求められるだろう。説得の論理や修辭を凝らした文章や形式美としての詩を学ぶことは、いずれも生徒の思考を探究的に深めたり、「問い」を立てるための手立てを与えたりする。

古典は過去の遺産ではなく、現代を生きる生徒たちが説得的に自己を表現するために先人から学ぶ価値ある存在となる。

■画竜点睛―飽くなき教材研究と授業改善

新科目「古典探究」の仕上げは、以上のような巧まれた教材を用いて、どのような授業を実践するか、そして生徒に探究的な意識を涵養できるかである。「画竜点睛」の主人公張僧繇は、我々教師一人一人なのではないか。

読み比べが楽しい！―漢文の読み比べから始まる古典探究―

酒井雅巳さかい まさみ

(果嶋高等学校)

■はじめに

「漢文を学ぶ意味がわからない」とよく耳にします。実社会に出れば、返り点に従いながら読んだり、訓点を施したりすることはないでしょうから、そう言われるのはとてもよくわかります。ただ、「漢文を学ぶ意味がわからない」と言っている生徒たちが、漢文の持つ圧倒的魅力に気づけば、そのようなことを思わなくなるのではないかと考えています。

大修館書店「言語文化」では、その漢文の圧倒的魅力を感じてもらいたいと思い、物語として読みやすく、生徒が後々大人になってからも思い出してくれることを意識した教材をそろえました（「完璧」「鶏鳴狗盗」「人面桃花」など）。「古典探究」においても、漢文の圧倒的な魅力を感じてほしいという願いから、生徒の心に残るような作品を数多くそろえました。また、作品の魅力を引き出すために、読み比べができる素材も数多く収録しています。読み比べをすると、「話としては似ているけどここが違う！」という新たな気づきが生

まれ、そこから「この違いはどこから生まれるのだろうか」といった疑問を持つことで、読みを深めることができます。この思考の過程がまさに「古典探究」といえるのではないのでしょうか。大修館書店『古典探究 古文編・漢文編』『精選古典探究』では、生徒たちの素朴な問いを想起させられる、読み比べができる多彩な教材を収録しています。実際にどのような読み比べができるか、見ていくことにしましょう。

■『論語』は読み比べがおもしろい！

「漢文になかなか時間が割けない」というのは、どの学校でも共通した課題なのだと思います。ですから、文章がコンパクトにまとまっていて、なおかつ中身の濃い『論語』は、人気の教材なのでしょう。しかし、実際『論語』で授業をすると、教師側から一方的に話して終わってしまうこともしばしばあり、主体的な活動をさせることは難しいのではないのでしょうか。そこで、今回の「古典探究」では、生徒に主体的

に考えてもらえるよう、『論語』にも読み比べをする教材を配置しました。

今回収録したのは、徳川家康の遺訓とされる「東照宮御遺訓」です。『論語』「過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし」の読み比べとして収録しました。「過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし」は、「やり過ぎもやり足りないのもどちらもよくない」という意味ですが、「東照宮御遺訓」は、「及ばざるは過ぎたるよりまされり（足りないほうが、やり過ぎよりも優れているのだ）」という内容になっており、孔子の考えとは真つ向から対立していて興味深いです。「東照宮御遺訓」が、なぜ「足りないことはやり過ぎに勝る」という考えなのかを生徒に考えさせ、二つの文章の違いを議論すると多くの意見が出るでしょう。あるいは「二つの文章を読み、どちらの考えがよりあなたの人生を豊かにするか」という題で小論文を書かせると、生徒主体の授業が展開できるのでないかと考えています。

■『史記』と芥川龍之介『英雄の器』

古典の授業で扱われることの多い『史記』項羽と劉邦の物語は、物語そのものが人口に膾炙しており、多くの生徒がその魅力に惹かれます。一方で、生徒は勝った劉邦側の視点で物語を読み進めてしまうことが多く、項羽からの視点で読も

うとすることをなかなかしません。『史記』の授業の後、「項羽って最後あつてなかったよね」「自分の負けた理由を天のせいにするのはどうかな」といった声もたびたび聞かれます。一方の視点だけでなく、逆の視点から作品を読み解くことは、情報過多であるこれからの時代を生き抜く上で重要なスキルになると考えます。

今回「古典探究」では、そのような多角的な視野を養う教材として、芥川龍之介『英雄の器』を収録しました。江戸時代中期の読み物『通俗漢楚軍談』を典拠とした短編小説です。敗れた項羽の実像に迫るこの作品を読むことによって、より多角的な視点を持って作品を読むことができるようになることをねらいとしています。

では、具体的にどのような授業に取り入れればよいか、見ていきましょう。まずは、「鴻門の会」「四面皆楚歌」「我何の面目ありて之に見えん」を読解します。事前にコラム「漢文の窓②司馬遷の視点」を読み、司馬遷が帝位についていない項羽の事跡をなぜ、本紀に記述したのかを確認しておくことより理解が深まります。

読解の後、『英雄の器』を読み、『史記』と読み比べをします。特に呂馬通が「項羽が、自分の失敗を天にかずけるのは卑怯だ」と言った場面に注目します。その部分と「我何の面目ありて之に見えん」の項羽の発言、「天之亡我、我何渡為

（天の我を亡ぼすに、我何ぞ渡らんや）」と比較し、この場面において、項羽は卑怯であるか考えさせます。その後、『英雄の器』の劉邦の最後のセリフ、「だから、『英雄の器』だったのさ」について触れ、劉邦が項羽をどのように評価していたのかを話し合わせます。おそらく様々な意見が出てくるでしょう。ここは、正解を一つに絞る必要はありません。大切なのは、自分の考えの根拠を明確にさせることです。生徒が「劉邦は項羽を高く評価していた」と発言したとして、その理由が「何となく」では、読み深めたことになりません。できれば『史記』本文に根拠を求めさせ、理由を明確にさせたものです。こうした活動を経て、初めて生徒は多角的な視点を持つことができるようになるのだと考えます。

■「桃花源記」と「天台二女」

筆者が高校二年生の時、陶淵明「桃花源記」を授業で教わりました。物語の内容を一通り理解したとき、「これは浦島太郎の話の筋に似ているな」と感じ、話の内容にとっても興味を持ったのをよく覚えています。そこから日本と中国の物語の相違点を探ることが楽しくなり、その結果、現在の職業につながることになりました。

「浦島太郎」の話が自分のベースになれば、「桃花源記」の話自体には、それほど興味を持たなかったかもしれません。

その経験から鑑みると、自分が知っている物語と似ているのに遭遇したとき、出会った物語により興味を持つのではないのでしょうか。

そのような筆者の経験から、似たような物語を読み比べることで、生徒たちの興味関心を引き出せるのではないかと考え、『古典探究 漢文編』では、「桃花源記」と「天台二女」を収録しています。これらはそれぞれ単独で取り扱うことも可能です。しかし、本教科書では、漢文と教材同士も読み比べることができるように教材を選定しており、二つの作品を読み比べをすることで、双方の作品の魅力がより引き出されるのではないかと考えています。

ではどのようにこの二つの教材を扱えばよいのでしょうか。まずは、二つの作品のおおまかな話の流れをつかませるとよいでしょう。二つの作品に共通の流れは、簡単に次の三つです。

① 桃の花をきっかけに異世界に入る。

② 異世界でもてなしを受ける。

③ 異世界から帰ってくる。

これは神話学者のジョーゼフ・キャンベルが掲げた「世界各国の神話では、主人公は①別の非日常世界への旅に出る↓②イニシエーションを経る↓③元の世界に帰還する、という共通の構造を持っている」という説にも通じます。

この流れに即して、二つの作品の相違点を考えさせます。異世界に入るきっかけとなる桃の花については、『桃花源記』の後に収録した、松原朗「日本の桜・中国の桃」を参考にするとより理解が深まります。

①の場面は桃が異世界に入るきっかけであることが共通点として挙げられます。中国では桃は神聖なものとして扱われますので、俗世間から離れた異世界を描くためには、必要なものであったでしょう。日本の『古事記』においても、黄泉の国から脱出を図るイザナキが追手を払うのに桃の実を使っているのは、このような中国の思想が関係していると考えられます。

②の異世界の様子と、③の帰ってきた後の様子の相違点を比較すると、同じような話の流れだと思っていた物語が、別の違う物語に見えてきます。たとえば②の場面でいえば、『桃花源記』に登場する異世界は、『老子』の「小国寡民」から「鶏犬相聞」を引用していることから分かるとおり、質素儉約の世界です。一方で「天台二女」に登場する異世界は、浦島太郎の竜宮城のように、豪華絢爛の世界です。この違い

に気づくと、「どうして同じような物語の構造なのに、このような違いが生まれるのだろうか」という疑問を持たせることができます。

③の帰還の違いも顕著です。『桃花源記』では、現在に戻ってきたのに対し、「天台二女」は「浦島太郎」の話と同じく、数百年後に戻ってきてしまうのです。この違いを生徒が知ったとき、驚きの声が上がりました。そして、「なぜ、このような違いがあるのか」という議論に自然と移っていきしました。やはり、読み比べながら相違点を探る活動は、生徒の興味関心を喚起するのに最適であるといえるでしょう。

■おわりに

「古典探究」の収録作品から、読み比べできて理解が深まる教材を三つ紹介いたしました。冒頭でも触れたように、探究学習で大切なことは、読み比べをすることによって、生徒に「なぜこのような違いが生まれるのだろうか」という疑問をもってもらいたいと思います。今回紹介した読み比べだけでなく、「古典探究」には読み比べができる作品を多数収録しています。この教科書を通して漢文の世界にどっぷりとはまってほしいと切に願っています。

●特集「中国古典」の歩き方

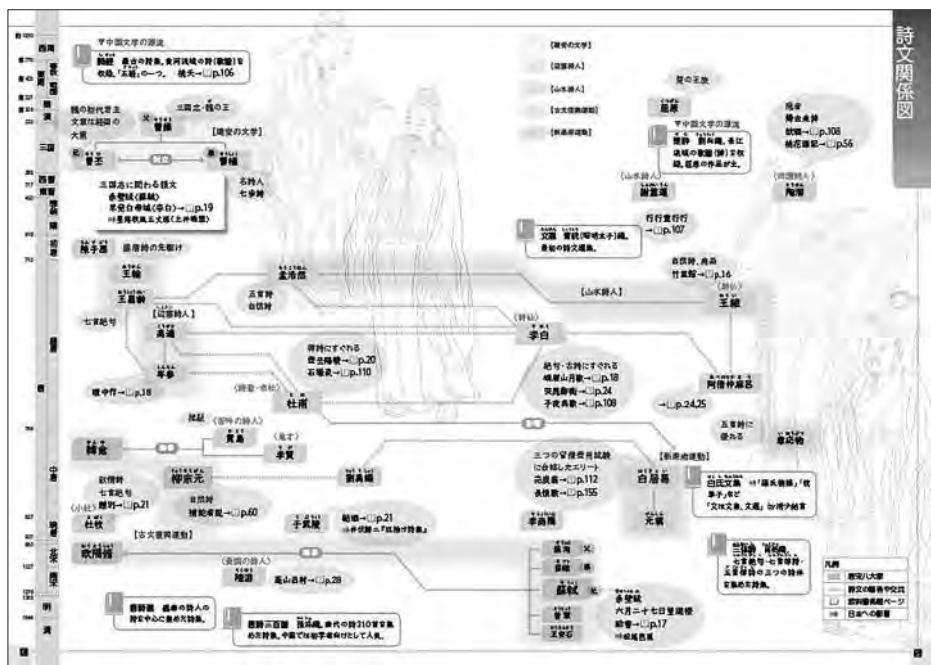
ミニガイド

大修館書店の教科書「言語文化」「古典探究」では、中国と日本、古典と現代など、さまざまな「つながり」を意識しています。「古典探究」では「諸子百家関係図」「詩文関係図」「漢文と日本文化」といったつながりを視覚化した資料を提示しました。

本特集では、その中から面白い「つながり」を取り上げてご紹介しています。実際の授業にも活用できます。

- ①『詩経』の面白さ
- ②『三国志』から広がる詩の世界
- ③陶淵明の田園と太宰治
- ④李白と杜甫の関係
- ⑤「長恨歌」と安史の乱
- ⑥語りを引き出す『孫子』
- ⑦孔子に「私淑」した孟子
- ⑧莊子の思想——自由と孤独の世界
- ⑨荀子と韓非子・李斯
- ⑩『史記』に由来する故事成語
- ⑪清少納言と中国の故事
- ⑫昔話と中国文学——こぶ取り爺と浦島伝説

詩文関係図



▲教科書に掲載している「詩文関係図」

『詩経』の面白さ

松岡榮志
まつおか えいじ

(東京学芸大学名誉教授)

『詩経』って、何だろう。古来、「詩」と言えば、この『詩経』のことだった。

「詩」、つまり歌（歌謡）の歌詞である。おおむね紀元前十一世紀から六世紀頃（周代初めから春秋時代中期）までの、中国の北方の歌謡を集めて、それを編修したもので、現在三〇五篇が残る。前漢頃には、すでに現在の形に近いものができ、注釈も作られた。とくに、戦国時代末年の魯の毛亨、毛萇（もうこう、もうしやう）によつて書かれた注釈「毛詩古訓伝」が流行したため、『詩経』は「毛詩」とも呼ばれる。

また、戦国時代の終わり頃には、三千首以上あったとされる歌謡が、やがて整理されて現在の三百五篇になったらしい。その編纂者の一人が、儒学の始祖とされる孔子で、彼が「論語」の中で、「詩三百、一言以て之を蔽（おほ）えば、曰わく、思（おも）ひ邪（よこしま）無し。」と述べたことから、「詩三百」とも「三百篇」

とも言われる。

前漢の武帝は、太学（古代の大学）を設立し、五経博士に役人になるための学問を教授させた。その教科書（経書）として、『詩経』、『書経』、『易経』、『春秋』、『礼記』が用いられた。もと、『楽記』（または『周礼』）を併せて「六経」と呼んだが、漢代には『楽経』が失われて五経になった。のちに、『大学』、『中庸』、『論語』、『孟子』と併せて、「四書五経」とも称される。

『詩経』は、風（十五地方の民謡）一六〇篇、雅（宮廷の雅楽、小雅七十四篇、大雅三十一篇）一〇五篇、頌（祖先祭祀の歌舞曲、周頌、魯頌、商頌からなる）四十篇、併せて三〇五篇を収める。（このほか、題名のみで本文のないものが六篇ある）

さて、何といつても面白いのは、各地の民謡を集めた「風」だ。言い伝えによると、周代には「采（採）詩の官」という役人が、毎年春になると街や農村に出かけ、木鐸をたたきながら民謡を採取したとか。それを整理して、太師（音楽の官）に命じて曲をつけ、天子に聞かせ、政治の参考としたとされる。すなわち、良い政治が行われていれば、人々は楽しく満ち足りた歌を歌い、ひどい政治であれば、苦しく恨みを含んだ

歌となる。

もちろん巻頭の「関雉（かんじ）」や「桃夭（とうよう）」はよく知られているが、私が好きなのは、若い男女の恋愛のシーンを描いた、こんな作品だ。

溱与洧、方渙渙兮。
士与女、方秉蘭兮。
女曰、觀乎。
士曰、既且。
且往觀乎。
洧之外、洵訏且樂。
維士与女、伊其相謔、
贈之以芍藥。

溱の川も 洧の川も、春の雪解け 水満々／若い男と 若い女、手に手をとって 蘭を採りに／「ねえねえ いっしょに あっちに行こうよ」／「おれ もう こないだ 行った」／「わたしとまた 行ったって いいでしょ。／洧水の向こうの水辺にまで行けば、／すぐく 広くて 面白いんだから」／男と女、二人きり 笑いがこぼれ／突つきあって 仲むつまじく
シャクシャクの花をあげる 君が好きだから

——『詩経』鄭風、溱洧

まるで、映画を見ているような、心ときめく歌である。

『詩経』には、こんなときめきと面白さが、あちこちに散りばめられている。

（注1）松岡榮志訳「三・五・詩経」北京・外文出版社

『三国志』から
広がる詩の世界山口正澄
やまぐち まさすみ

(東京都立大江戸高等学校)

『三国志』には数々の詩が登場し、作品に関連する詩も数多くあります。その中から日本でも有名な登場人物に関わりのある詩を四つ紹介します。

①「一点の桜桃絳唇を啓く／両行の碎玉陽春を噴く／丁香の舌は衝鋼の剣を吐き／姦邪乱国の臣を斬らんと要す」

暴虐の限りを尽くして専横を極めていた董卓に対し、歌や舞に優れた美女の貂蟬が歌った古詩です。この詩の前に貂蟬が歌った古詩が董卓を讚美していたので、董卓はこの歌で自分のことを姦邪乱国の臣だと暗に誹られているのも気づきません。むしろ鮮やかに勇ましく歌う貂蟬を「仙女のようだ」と褒めて連れ帰り、彼女にうつつを抜かすようになった董卓は、ろくに政務を執ろうとしなくなり、最後は猛将の呂布に討

たれてしまいます。

②「酒に対して当に歌ふべし／人生幾何ぞ譬ゆるに朝露のごとし／去日苦だ多し／慨して当に以て懐すべし（中略）月明らかにして星稀に／烏鵲南に飛ぶ／樹を繞るごと三匝／何れの枝にか依るべき／山は高きを厭はず／海は深きを厭はず／周公は哺を吐き／天下心を帰したり」

これは曹操の「短歌行」です。楽府の一種で、楽器の伴奏によって歌われました。

『三国志演義』では、赤壁の戦いの前夜に酒を飲みながら即興で作ったとされます。内容は出陣を祝う意味になっていますが、実は自分を補佐する賢士を求めた人材登用の詩であり、人の使い方が巧みでもあった曹操の人物像が窺われます。

③「朝に辞す白帝彩雲の間／千里の江陵一日にして還る／兩岸の猿声啼き住まざるに／輕舟已に過ぐ万重の山」

李白の代表的な七言絶句の一つ「早に白帝城を発す」です。安史の乱の後に廬山で隠棲していた李白は、永王の幕僚として招かれましたが、反乱軍に加担したという罪で肅宗の朝廷側に捕らえられて流罪とされ

ました。その配流の途中の白帝城近くで罪を許され、帰途に就いた時の詩です。この白帝城は、『三国志演義』の主人公である劉備の終焉の地であり、彼が夷陵の戦いで呉に敗れて逃れた城です。劉備は後事を諸葛亮に託し、白帝城で没しました。

④「祁山悲秋の風更けて／陣雲暗し五丈原／零露の文は繁くして／草枯れ馬は肥ゆれども／蜀軍の旗光無く／鼓角の音も今しづか／丞相病篤かりき（後略）」

わが国の詩人、土井晩翠の「星落秋風五丈原」の冒頭で、全体は七章三百四十九行に及ぶ長い詩です。漢詩の書き下し風の五七調で、天才的な軍師として名高い諸葛亮の生涯を題材に詠まれました。劉備に「三顧の礼」をもって迎えられた諸葛亮は、その才知を駆使して蜀漢の建国に尽くしました。劉備の亡き後は宰相として国を統治していましたが、五丈原での陣中で病に倒れてしまいます。諸葛亮が没した時、大きな星が蜀の陣営に落ちたと言われており、このことは「死せる諸葛 生ける仲達を走らす」として有名なエピソードです。

このように『三国志』にまつわる詩の世界を知って楽しむ読み方もお勧めします。

陶淵明の田園と

太宰治

渡邊登紀
わたなべ とき

(日本大学)

東晋末から南朝宋初という動乱の時代を生きた陶潜（三五四～四〇六、字は淵明）が、四〇歳を過ぎたところでそれまで務めていた官職を辞して故郷に帰り、その決意を「田園將に蕪れんとす、胡ぞ帰らざる」と「帰去来（ききよひ）の辞」に記したことは広く知られている。その後の陶淵明は二度と官職に就くことなく、故郷にて田園生活を営み、その暮らしを詩に詠んでいる。「菊を采る（とくをさむ）東籬（とうし）の下、悠然として南山を見る」の句で知られる「飲酒」詩もその一つである。

この「田園」の語が文学作品に登場したのは、おそらく陶淵明の作が最初である。^{（注1）}漢から南北朝時代の文学作品を集めたアンソロジー『文選（もんぜん）』の全文を検索しても「田園」でヒットするのは「帰去来（ききよひ）の辞」一作品のみである。司馬遷の『史記』にはすでに「田園」の語をいくつか見つけることが

できるが、その用例から類推すると、「田園」の語は陶淵明以前にはあくまで実用語であり、詩的言語ではなかったようである。

陶淵明はこれまで詩のなかに用いられることのなかった「田園」という語を用いて、これまで詩のなかに描かれることのなかった「田園」空間を「帰去来（ききよひ）の辞」のなかに描き出し、以降、自らの生活空間をくりかえし詩に詠んだのである。それは、現代人が日々の生活をSNSにアップして、その暮らしぶりを演出する感覚とどこか似ているかもしれない。ただし、陶淵明が生きた時代には、山に籠って隠者となることを夢見る文学はあっても、農地に囲まれた場所での生活し、その日々の生活を綴るといった文学はいまだ存在していなかった。そのため、生前の陶淵明は隠者としての評価は高くとも、詩人としての評価はそう高くはなく、新たな文学の領域を切り拓いた陶淵明の文学が高く評価されるようになるのは唐代以降のことである。

後世、陶淵明の文学は広く読まれ、日本にもその愛読者は多い。太宰治（一九一九～一九四二）もまたその一人である。太宰治には、その母が亡くなる直前に執筆した「帰去来」という掌編がある。津軽の生家から勘当さ

れ、長らく故郷の地を踏むことのなかった太宰が、生家の番頭役である二人の後見人の協力を経て十年ぶりに帰郷し、老いた母と再会した思い出が綴られている。

生家の赤い大屋根、墓のそばの栗の太木、仏間での母や祖母との再会、お膳とともに差し出されたビール、十年前から何も変わっていない庭の草木、便所の中にまで聞こえる祖母の大きな話し声。二度と跨ぐことが出来ないとも思っていた生家の敷居を跨いだ太宰は、目に映る一つ一つを丁寧に描いて、その喜びを表現する。この情景は、「帰去来（ききよひ）の辞」における帰郷シーンと重なり、かつ「帰去来（ききよひ）の辞」が持つ躍動感をも見事に写しとっている。

全体を俯瞰するとその構成もどこことなく似ている。ぐずぐずと帰ることができぬ事情を述べながらも、いざ帰るとなると一直線（まっすぐ）に「帰去来（ききよひ）の辞」を序から読んだ上で、太宰治「帰去来（ききよひ）」を読んでみてほしい。この二重奏の中に新たな発見があるはずだ。

（注1）拙稿「田園と時間——「帰去来（ききよひ）の辞」論」（『中国文学報』第66冊、二〇〇九）

（注2）川合康三「陶淵明「帰去来（ききよひ）の辞」の「序」をめぐる」（『六朝学術学会報』第9集、二〇〇七）

李白と杜甫の關係

谷口眞由実

(長野県立大学)

八人の酒飲みの風流人の筆頭として、放縦で天衣無縫な李白を活写している。

一方、次の李白の詩「魯郡の東石門にて杜甫を送る」には、自らのよき理解者である杜甫への真率な友情が溢れている。

醉別 復た幾日ぞ
登臨 池台に偏し

何れの時か 石門の路に
重ねて金樽の開く有らん

秋波 泗水に落ち
海色 徂徠に明かなり

飛蓬 各自に遠ざかる
且く手中の杯を尽くさん

この詩は、共に梁宋、齊州(今の山東省)、魯(同上)を旅し、別れと再会を経て翌年の秋、魯郡の石門での別れに際して作られた。頌聯で李白は再会を期し、「重ねて」「金樽」を開けて一緒に飲めるだろうかと問いかけている。

翌年、杜甫は長安で江東の李白を思い「春日李白を憶ふ」を詠んだ。

白や 詩 敵無し
飄然として 思ひ群ならず

清新なるは庾開府

俊逸なるは鮑參軍
渭北 春天の樹
江東 日暮の雲

何れの時か一樽の酒
重ねて与に細かに文を論ぜん

尾聯には、先の李白の飲酒の誘いに答えるかのように「一樽」を開け、「重ねて」共に細かに文学を論じたいとの熱望を述べる。詩人同士の率直で深い交流が表れている。

冒頭「白よ」と名前で親しく呼びかけ、李白の詩は匹敵する者がなく、大風にひらりと翻るように詩想は自由で世俗を超越している」と絶賛する。杜甫にとって李白は第一に文学、特に詩における尊敬の対象であった。頌聯では、李白の詩を杜甫が尊敬してやまない六朝時代の庾信の晩年の詩風や鮑照詩に擬えている。その「清新」さや「俊逸」さに李白詩に通ずる本質的で独創的な魅力を発見し表出している。

その後二人はついに再会でできなかった。杜甫は放浪の旅に出た後、「李白を夢む」で友の身を案じ、晩年に至るまで二人で漫遊したことを懐かしんで詩に詠じ続けた。

盛唐を代表する詩人李白(七〇一―七六二)と杜甫(七一二―七七〇)が出会い、共に旅をし、文学を論じ、詩を贈りあったことは奇跡に近いできごとである。文学史の上でも注目される。二人が洛陽で出会ったのは、天宝三載(七四四)の初夏、李白は四十四歳、杜甫三十二歳の時であり、李白は十一歳年上であった。李白はそれに先立つ天宝元年から玄宗に翰林供奉として仕えた後、朝廷を辞し、梁宋(今の河南省)へ向かう途中であった。就職活動のために都長安へ上るところであった杜甫にとって、すでに詩人として知られていた李白への敬慕の情は、計り知れないものがあった。杜甫の「飲中八仙歌」は次のように詠じる。

「李白は二斗 詩百篇 長安市上 酒家に眠る 天子呼び來たれども 船上に上らず 自ら称す臣は是れ酒中の仙と」

「李白は二斗 詩百篇 長安市上 酒家に眠る 天子呼び來たれども 船上に上らず 自ら称す臣は是れ酒中の仙と」

「李白は二斗 詩百篇 長安市上 酒家に眠る 天子呼び來たれども 船上に上らず 自ら称す臣は是れ酒中の仙と」

「長恨歌」と 安史の乱

谷口眞由実

(長野県立大学)

驚破す 霓裳羽衣の曲

玄宗が楊貴妃を伴い、驪山宮で歓楽を尽くす中、突如安祿山の戦太鼓が大地を揺がす響きをたてて押し寄せ、栄華の夢は一瞬にして破られた。「漁陽の鼙鼓地を動して来る」句は明暗鮮やかな場面転換を見せる。

ここで思い合われるのは、盛唐・杜甫「哀江頭」である。同詩は杜甫が長安で賊軍に軟禁される中で作られた。反乱前の玄宗と楊貴妃らの華麗な行幸を回想し、今や王朝の危機に瀕した悲劇を描く。中間部で、身を翻し天に向かひ仰ぎて雲を射れば一箭正に墜とす 双比翼 明眸皓齒 今何くにか在る 血汚の遊魂帰り得ず

射落とされる「双比翼」によって二人の悲劇の前触れを、次いで暗に馬嵬坡で楊貴妃が死を賜わった悲劇を描く。「去住彼此消息無し」と続き、二人が幽冥境を異にし二度と会えない悲しみをうたう。

「哀江頭」は安史の乱のさなかに制作され、唐王朝が揺らぐ一因となった大事件を目の当たりにして、その悲劇と喪失感を詠出する。この「哀江頭」の展開に対して「長恨歌」

の構成には大きな工夫がある。第三十三句「第七十四句では楊貴妃の死後、玄宗の意気消沈した様が描かれ、ここで物語は一転仙界へと飛翔する。第七十五句「第二百二十句、悲嘆にくれる玄宗を見かねた道士が楊貴妃の魂を探し求め、仙界で太真（楊貴妃）を見い出す。仙女の太真は現世の栄華を洗い流した清澄な存在「梨花一枝春雨を帯びたり」として表わされ、玄宗への変わらぬ愛はかつての誓いの言葉「天に在りては双比翼とならん」を伝言することで明かされる。杜甫「哀江頭」で射落とされる「双比翼」は二人の愛に忍び寄る悲劇を告げているが、「長恨歌」では生死を超越した不変の愛の象徴となる。

杜甫「哀江頭」が喪失感を表出するのに対して、白居易は悲劇の事件を背景としつつ、玄宗と絶世の美女楊貴妃との恋愛と歓楽の日々が、一転反乱によって破滅を迎えた顛末を縷々物語る。特に注目されるのは玄宗（上皇）が道士を通して仙界の太真の消息を得るというロマンに富んだ虚構の世界を展開させたことである。

不変の愛を歌い上げる物語叙事詩はこうして誕生した。

安史の乱とは、安祿山の反乱（七五五年十一月勃発）とその一味の安慶緒・史思明による計八年間に及んだ戦乱をいう。その約五〇年後の元和元年（八〇六）十二月、当時盩厔県尉であった白居易（七七二～八四六）は友人の陳鴻・王質夫と仙遊寺に遊び、勧められて「長恨歌」を作ったという。「長恨歌」の最大の魅力は、現実の事件に基づきながらも波乱に富むストーリー展開にある。第一句「第三十二句では漢皇（実は玄宗）と楊家女（楊貴妃）の出会いと天下泰平を背景に繰り広げられる二人の愛の日々が詠じられ、安祿山の乱の勃発は次のように描かれる。

緩歌慢舞 糸竹を凝らし
君王 看れども足らず
漁陽の鼙鼓地を動かして来たり

語りを引き出す『孫子』

鈴木達明

(愛知教育大学)

『孫子』は、漢文の教科書教材の常連でないにも関わらず、中国古典として拔群の知名度を誇っている。その背景には、ビジネスや処世術などに関して「孫子の兵法」をうたう書籍が今なお盛んに出版されていることがある。中には孫子の思想からかなり離れていると思われるものもあるが、中国古典が縁遠いものとなった今の日本において、『孫子』の受容のされ方は特筆に値する。

その大きな要因は、もちろん「孫子の兵法」自体の魅力にあらう。好戦的でなく自他ともに損害を最小限にしようとする態度、偶然を廃し情報収集に基づいた計画を重視する合理性、自己を特別視する独善性に陥らず、勝利はあくまで相手との相関関係の中で決まるとする認識などは、時代を超えた有効性を持つものと言える。

ただ、『孫子』が広く受容される要因は

それだけではなさそうだ。ここでは、『孫子』の持つ、読者の語りを引き出す性質に注目したい。

『孫子』の代表的なテキストである「十一家注本」には、名の通り十一人の注釈が収められる。兵書としてはもちろん、諸子全体を見ても、北宋以前の注釈がこれだけ残るものは少ない。注釈者の中には、『三国志』の英雄として日本人にもよく知られる曹操や、「江南の春」の詩でおなじみの唐の詩人杜牧、北宋を代表する詩人である梅堯臣など著名な文学者も含まれており、孫子の人気ぶりがうかがえる。

彼らの注釈の中には、本文を敷衍して説明を加えるものや、歴史上の事件や個人的な経験上の実践例を示して正しさを証明しようとするものが多く見られる。ときには、孫子にかこつけて、注釈者自身の考察や知識経験を披露する場ようになっていくところもある。古典に対する慎みを忘れない中国の読書人たちも、孫子の前では自らを開陳する欲望を抑えられないかのようだ。

それはなぜか。一つには、戦略や基本的な戦術が中心であり、政治や軍隊管理に関する議論、あるいは特定の状況における実践マニユアル的な記述が少ないという内容

上の性質がある。それによって、政治体制や技術の変化、また注釈者本人の軍事的な専門知識にかかわらず、誰もが容易に何かしらを語ることができる。

もう一つは、その論述の仕方である。「百戦百勝は善の善なる(最善の)ものに非ず」や「彼を知り己を知れば百戦して危うからず」など、孫子は単刀直入にテーゼを示す。前後の記述で合理的に説明はされるが、他の諸子が「仁義」や「道」などを持ち出すのと異なり、それを何かの根本的な原理と結びつけて説明することはない。孫子の示すテーゼは、しばしば常識を裏切る警句のような響きを持ち、読者の頭を回転させる。しかも、読者に先回りして、その原理が説明されることもない。それにより読者は自由に自分の考えと結びつけて語ることができる。このような内容と叙述の特徴が、『孫子』を、読者が何かを語りたくなる書物としているのではないだろうか。

新学習指導要領でも古典は「読むこと」の領域に限定されている。ただ、古典が生命力を持つためには、そこから何かを考え議論する出発点となることが大事であろう。『孫子』は、自ずからその期待に応えられる貴重な古典教材なのかもしれない。

孔子に「私淑」した
孟子塚田勝郎
つかだかつろう

(元筑波大学附属高等学校)

教育、育英、良心、助長、五十歩百歩、自暴自棄。いずれも『孟子』から出た語である。「往く者は追はず、来たる者は拒まず」や「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」、「千万人と雖も吾往かん」などの名言・格言も『孟子』から出ている。断片的ではあるが、私たちは知らず知らずのうちに『孟子』に親しんでいるといえよう。

「私淑」の語も『孟子』を出典とする。

予未^{われ}得^タレ^{タル}為^ニ孔子之徒^ニ也、予私^{ひそかに}淑^ニ諸^{スル}人^ニ也。(孟子、離婁下)

孟子は「私は不幸にも生まれるのが遅く、孔先生の直接の弟子にはなれなかったが、幸いにも先生の学問や人格を、それを伝え聞いている人から学んで、ひそかに身を修めて善くすることができた。」と述べる。「そ

れを伝え聞いている人」とは、『史記』『孟子・荀卿列伝』によれば、孔子の孫である子思の門人であるという。孔子に私淑し得た孟子の、喜びと自負が読みとれる。

ところで、孟子は自らと孔子との「近さ」を次のように説明する。

由^{より}孔子^ニ而^{この}来^{ルマデ}、至^ニ於^ニ今^ニ、百有^{ナリ}余^{ルコト}歳^ヲ。去^{コト}聖^ニ人^ノ之^ヲ世^ヲ、若^レ此^ニ其^レ未^レ遠^キ也。近^ニ聖^ノ人^ノ之^ヲ居^ニ、若^レ此^ニ其^レ甚^{ダシキ}也。然^リ而^{シテ}無^ク有^ル乎^ニ爾^ノ、則^チ亦^タ無^ク有^ル乎^ニ爾^ノ。(孟子、尽心下)

* 乎爾＝語調を整える助字。

ここでいう「聖人」は、言うまでもなく孔子のこと。孟子はまず、孔子との時間的な「近さ」を述べ、「孔子の道を見て知っている人がいないとすれば、後世、聞き知る人もいなくなるだろう。自分がそれを伝えなければ、誰がするだろう。」と強い決意と自信を記す。

孔子から現在までの年数「百有餘歳」は概数であり、孔子の没年(紀元前四七九年)と孟子の生年(紀元前三七二年)との差は一〇七年。また、孟子のいわゆる政界デビュー(梁の恵王との面会、紀元前三二二年とされる)との時間差を計算すると、一

六〇年弱となる。孟子はこの文章の前段で、伝説時代の帝堯・帝舜、殷の湯王、周の文王が、五百年周期で聖王・聖天子として世に現れた述べているが、これに比すると、百余年は時間的にきわめて近いといえる。

加えて、聖王・聖天子の名補佐役として、堯・舜には禹と皋陶、湯王には伊尹・箕朱、文王には太公望・散宜生の名を挙げ、「孔子の補佐役は私以外にない。」と、孔子との人間関係の「近さ」も暗に示している。

さらに孟子は、孔子との物理的距離の「近さ」も挙げる。孟子の住む郷が「聖人の居」のあつた魯に非常に近いことも、孔子への親近感につながる。

現在、山東省曲阜市の孔廟(魯の哀公の建てた廟)、孔府(孔子の嫡子の暮らした邸宅)、孔林(孔家歴代の墓所)は世界文化遺産に指定され、国内外から訪問者が絶えない。孟子ゆかりの郷(現在の山東省鄒城市)は、曲阜から三〇キロほどの指呼の間にある。そこには孟子廟はあるものの、規模は小さく、パネル展示が中心で、知名度も孔子関連の施設に劣る。単純な比較はできないものの、儒家中興の祖であり、聖の尊称を得ている孟子の存在が軽んじられていると感じるのは偏見だろうか。

莊子の思想

自由と孤独の世界

鈴木達明

(愛知教育大学)

儒家經典や他の諸子が、あくまでも人間社会のあり方にこだわったのと異なり、莊子は人間を越えた視点から、この世界の本当のあり方を考えた思想家であった。

莊子の考える世界の姿を、「蝴蝶の夢」

の寓話から見よう。夢の中で蝶となり、目覚めた時は莊周という人間となる。その時々には、自分では蝶や莊周としか認識できず、今が現実なのか夢なのかも判断がつかない。この蝶と莊周のように万物は生成変化し続けており、過去や将来の変化も知らないまま、万物はただひたすらに今このときのあり方を受け入れるしかない。だからこそ万物の間には何ら価値の差違はなく、生も死も変化の一過程として、そこに喜怒哀楽の感情の入る余地はない。

世界をこのようにしているはたらきが「道」である。それは人間の知では理解す

ることはできない。それなのに人はそれに気づかず、自分たちの勝手な尺度で世界を切り分けようとする。善悪や是非の判断、物事の善悪や美醜の価値評価、これらは全て、世界の本当のあり方とはかけ離れた人間の勝手な決めつけであるが、人はそれに捉えられて苦しんでいる。莊子は、このような惑いから抜け出し、「道」のはたらきと世界の本当のあり方を知ることによって、人間は「自由」を得ることができると考えた。ただしそれは簡単ではない。親子愛をはじめとする他者との愛憎、善行の喜びを伴う正義感、成長の喜びや老衰の悲しみ、優越感や嫉妬心、これらはいずれも社会関係を前提とした人間としての価値判断から生まれるものだ。莊子が示す世界の本当のあり方を受け入れることは、これらを手放すことである。他者との関係から作られる人間社会の相対的な価値づけを全て解体した後に残るのは、「個」としての絶対的な価値である。他の何物にも由らず、自らのみに由ることが、莊子の示す「自由」であり、それはたった一人で「道」と向き合う、究極の孤独でもある。

このような自由に達した人は、「至人」と呼ばれる。『莊子』には、しばしば一般の人が至人と出会い、彼らを通して「道」のはたらきに触れる寓話が見られる。例えば東海の鼈すげもんと語った井の中の蛙か(秋水篇)や、烟仕事えんしごとの丈人(老人)と出会った子貢しこう(天地篇)のように、そのときは誰もがひどく驚き恐れ、呆然自失となる。

その一方で、至人たちはみな楽しげである。踊ったり歌ったりし、大いに笑い楽しんでる。生きて死ぬことの喜び苦しみや、全ての相対的な価値から解き放たれて、どのような姿であつても、今この世界にこのようにあることを肯定し、満ち足りている。究極の孤独と背中合わせの「自由」。恐れを超えて、「道」を直視する人のみがその喜びを感じることができのかもしれない。

『莊子』は、日本初のノーベル賞受賞者である湯川秀樹博士の愛読書としても知られる。幼少期より漢籍に親しんだ博士が、その中でも特に莊子を好んだ一因には、最初に見たような莊子の思想的な独自性が、物理学や素粒子論とつながる方向性を持つことがあるのは確かであろう。だが、その自伝である『旅人』を読むと、少なくとも十代の博士にとっては、孤独や日々の生きづらさに寄り添う書物として『莊子』はあつたように思われる。

荀子と韓非子・李斯

塚田勝郎

(元筑波大学附属高等学校)

きなり。猶ほ零せずして雨ふるがごときなり。……」(荀子、天論)

「雨乞い(零)をしたから雨が降るのではない。」という主張には、二千年以上前のものとは思えない新しさがある。

荀子は楚の蘭陵にいたころ、多くの門人を集めて自説を講じた。その中に、後に法家思想を大成する韓非と、秦の始皇帝の丞相として名を残す李斯がいた。

韓非(？―前二三三)は戦国の七雄の一国、韓の庶公子として生まれた。

非、為れ人口吃、不レ能道説。而善著書。与李斯俱事荀卿。斯、自以為不レ如非。(史記、老子・韓非列伝)

『史記』の韓非に関する記事は、韓非が吃音障害のために文字言語に注力したこと、李斯とともに荀子に師事したこと、李斯は韓非にはかなわないと思っていたという記述に始まる。次いで、賢人を取り立てず、「浮淫之蠹(いい加減で不真面目な、国を蝕む木食い虫のような者たち)」ばかりを引き立てていると、韓侯を諫めたことを記す。しかし諫言は用いられず、悲観した韓非は「孤憤」「五蠹」他、十余万字の書を作ったという。中でも「説難」は、君

主に意見を説くことの難しさを言い尽くしているにもかかわらず、韓非は秦で殺され、自身はこの「難」から逃れ得なかった。

李斯(？―前二〇八)は若くして郷里の小役人となったが飽き足らず、荀子に師事して帝王の術を学んだ。業を終えるや、当時の最強国、秦に仕えようとして、荀子に言った。

詬莫レ大ニ於卑賤一、而悲莫レ甚ニ於窮困一。(史記、李斯列伝)

人間の価値を決める基準は、富貴か貧賤かだけであるという人生哲学は、終生李斯を支配し、また彼を不幸に導いた。始皇帝に仕えた李斯は、焚書坑儒などの建言を行い、いずれも裁可された。上昇志向を実現しつつある李斯の前に現れた障壁が、韓非である。李斯は、韓非が韓の使者として入朝するや、始皇帝との面会が実現する前に、牢中の韓非に毒薬を送り、自ら命を絶たせた。李斯は栄華を極めるが、始皇帝の死後、運命の歯車は逆転し始める。二世皇帝の世になると、李斯は宦官の趙高に主導権を握られ、腰斬の刑に処せられて生涯を終えた。李斯の強烈な上昇志向と功利主義が招いた結果であった。

戦国時代の儒家の思想家荀子(前二三三?―前二三八)は名を況といい、尊ばれて荀卿、孫卿とも呼ばれた。儒家の祖である孔子は、仁(深い人間愛)の実現のために、忠恕(真心と思いやり)と礼(社会的慣習、規範)を説いたが、その門人は忠恕を重視する曾子学派と、礼の実践を重く見る子夏・子游学派とに分かれた。前者を継承したのが「性善説」に立つ孟子であり、荀子はこれに対して「性悪説」に基づく礼至上主義を唱えた。

人之性惡、其善者偽也。(荀子、性惡)
*偽＝人為。作為。

また、荀子は人間界への天の影響を否定し、科学的・合理的に論を進めた。

雩して雨ふるは何ぞや。曰はく、「佗無

『史記』に由来する
故事成語

山口正澄

(東京都立大江戸高等学校)

『史記』に由来して今日の日本でも広く知られる故事成語は実に多くあります。ここでは授業で話題にしやすく、生徒が関心をもちそうな故事成語を四つ紹介します。

①四面楚歌

項羽の軍を包囲した漢の劉邦は、部下達に楚(項羽の出身地)の国の歌を一齐に歌わせました。これを聞いた項羽は楚の人々が歌っていると思い込み、味方が漢に寝返って孤立無援になったと落胆した、という故事からできました。生徒によっては、なぜ漢の歌ではなく楚の歌で項羽が落胆したのかを疑問に思うようですが、劉邦の計略だったという点を理解させるとよいでしょう。「四面楚歌」の文中には「力は山を抜き気は世を蓋ふ/時利あらず騅逝かず/騅の逝かざる奈何すべき/虞や虞や若を

奈何せん」の古詩があり、詩中の「抜山蓋世」も有名な四字熟語です。

②刎頸の交わり

最上位の大臣となった藺相如の活躍をよく思わない廉頗は辱めを与えようとしたが、自分達が争うのは国に害をなすと考えた藺相如はあえて出会うことを避けていました。その意図を知った廉頗は、着物を脱いでいばらのむちを背負うことで自分の非を認めて謝罪の意を示し、その結果お互いは相手のために首を切られても後悔しないほどの深い親交を結んだ、という故事からできました。類語として、『三国志』の劉備と諸葛亮との間における「水魚の交わり」、『史記』の管仲と鮑叔牙との間における「管鮑の交わり」、『晋書』の桓温と殷浩との間における「竹馬の友」があり、この「竹馬の友」は太宰治の『走れメロス』の中でも使われています。

③桃李言わざれども下自ら蹊を成す

桃や李は別に何か言うわけではないが、その木の下には良い香りに誘われて人々が集まり、自然と小道ができる、という故事からできました。『李将军列伝』で李将军

を評するのに司馬遷が使った諺である点まで理解させたい故事成語ですが、生徒が興味をもちそうな話題で触れるならば、成蹊大学の大学名がここから取られていることや、俳優の松坂桃李さんの名前を挙げて、この故事成語が由来の一つになっていることを紹介してもよいでしょう。ちなみに、故事成語にある「桃李」の読み方は「とうり」ですが、松坂桃李さんの名前の読み方はご両親の考えから「まつざかとおり」なのだそうです。

④完璧

趙の藺相如が、強大な秦の圧力にも屈せず、国宝の璧を命がけて無事に持ち帰った、という故事からでき、完全無欠であることを意味するようになりました。「璧」は中央縫い穴のある円盤状に作った玉やガラスの製品です。よくある漢字の間違いとして「完璧」がありますが、由来を知ることとで誤りを知ることができます。

このように、漢文を学ぶことは語彙力を増すためにも有効です。

清少納言と

中国の故事

三木雅博

(梅花女子大学)

夜をこめて鶏のそら音ははかるともよに逢坂の関は許さじ

『百人一首』に採られた清少納言のこの歌は、『枕草子』によると彼女の元を訪れた藤原行成が、夜更けに出かけねばならなくなり、翌朝出先から「昨夜は夜通し貴女と物語をしていたかった」と手紙をよこしたのに応えた歌で、「よに逢坂の」は「関を越えて逢いに来ることは許しませんよ」と、関所の名の逢坂に「逢ふ」を掛けて行成の下心を皮肉ったのである。この下の句は掛詞さえわかれば理解できるが、上の句の「夜をこめて鶏のそら音ははかるとも」と「関は許さじ」とはどう繋がるのだろうか。

実はこの歌は、中国・戦国時代の斉の孟嘗君が秦に囚えられ、脱出して夜更けに国境の函谷関まで来た時、鶏が鳴かない

と関が開かないので、鶏の鳴きまねがうまい部下に鳴きまねをさせて関を開かせ、無事逃げのびることができたという、『史記』孟嘗君列伝の故事を踏まえている。「鶏の鳴きまねをしても、逢坂の関は函谷関のように簡単には開けないわよ」と行成を牽制しているのである。

また『枕草子』の「五月ばかり月もなくいと暗きに」の段では、五月闇の夜、名乗りもせず来訪し突然御簾の外から竹を差し入れてきた公卿たちに「おい、この君にこそ（あつ、「この君」じゃないの）」と清少納言が応じたところ、公卿たちが感心して「裁ゑて此の君と称す」と口々に朗唱して帰っていったという記事がある。これは風流人で竹を愛した晋の王徽之（書聖王羲之の息子）が、竹を指さして「何ぞ一日も此の君無かるべけんや（どうして一日もこの君無しでいられようか）」と言った、という『晋書』王徽之伝の故事を彼女が知っていて、それに驚いた公卿たちが、この故事を詠んだ藤原篤茂の「晋の騎兵参軍王子猷、裁ゑて此の君と称す」という佳句を朗唱して嘲したたのである（『王子猷』は王徽之の字。「騎兵参軍」は彼の官職）。こうした男性貴族たちと清少納言のやり

とりを見ていると、平安貴族の文化は一般的に「国風文化」といわれるが、まだまだ中国の文化が深く根付いていたことがよくわかる。特に男性貴族たちは様々な場面で古の中国の著名人たちを規範とし、彼らの行動や言葉を意識した発言をするため、彼らと直に應對する必要があった清少納言や紫式部などの（女房）と呼ばれる女性たちには、こうした中国の歴史故事に関する知識が必須であった。彼女たちの主人である皇妃や姫君に求められたのは和歌や琴などの素養であったが、これらの上流貴族の女性たちと清少納言ら女房階級の女性たちとは、必要とされる能力の内容が異なっていたのである。

では、中国の歴史故事の知識を誇る女房たちの中で、清少納言はどのようにその個性を発揮したのか。紫式部はこうしてその知識を集約して長編の『源氏物語』を紡ぎ出したが、清少納言は、前に見たようにその知識を当意即妙に利用して、男性貴族たちと気の利いたやりとりを行った。自分たち男性と対等に中国故事の知識を使いこなす、彼女の即興的なパフォーマンスに、男性貴族たちは驚き、喝采を送ったのである。

昔話と中国文学

——こぶ取り爺と浦島伝説

山崎 藍

(青山学院大学)

日本の昔話に、中国文学を始めとする世界各地の文学との関係を垣間見られる作品があるのをご存じだろうか。

例えば『宇治拾遺物語』「鬼に瘤こぶとらるる事」つまり「こぶ取り爺」は、ヨーロッパから中東、アジアまで広く伝えられている。一例として、後漢・邯鄲かんたん淳じゅん『笑林』(散佚)に評を付けた明・楊茂謙『笑林評』所収の話を挙げよう。

首にこぶがぶらさがった男が、ある晩廟に泊まった。廟神が「あれは何をする者か」と尋ねると、廟神の従者が「蹴毬けまりをする者でございます」と答えた。廟神は「では毬を取って参れ」と命じ、男のこぶが取られ、男は喜んで廟を後にした。翌晩こぶがある別の男が廟に泊まった。廟神が同じように「これは何か」と問うと、従者は「蹴毬をする者です」と答えたため、廟神が「では

昨夜の毬をこやつに返すように」と言い、この男は結局こぶを二つぶらさげるはめになった。

また「浦島伝説」のような異界訪問譚・仙境説話も世界各地に残っている。六朝志怪「天台二女」(『幽明録』所収)もそのひとつだ。

漢の永平五年(六二)に劉晨りゅうしんと阮肇げんしょうが天台山で道に迷ってしまった。山頂にある桃の実を食べて元氣を取り戻し、山を下って水を汲んでいると、山腹から蕪わの葉や胡麻飯が残った杯が流れてきた。流れを遡ると二人の美女がいた。彼女たちと結婚し半年間を過ごしたが、望郷の念に耐えられず、帰り道を教わり下山した。故郷に戻ると村の様子が変わっており、七代目の子孫に、先祖が山へ入って道に迷い帰れなくなったという話が伝わっていることを知る。晋の太元八年(三八三)、二人はまた家を出たまま行方がわからなくなった。

陶淵明「桃花源記」も仙境説話の代表作であろう。武陵の漁師が桃の花の林に迷い、洞穴を抜けて村里にたどり着く。村人達は「先祖が秦の始皇帝の圧政から逃れて以降、ここでの世界と隔絶して暮らしている」と言う。村人から他言しないように釘をさ

されたにもかかわらず、漁師は目印をつけながら帰り、しかも太守に報告してしまう。太守は漁師に案内させたが目印は消えており、尋ね当てることができなかったという内容で、高校漢文の教科書にもしばしば採用されている。

「天台二女」「桃花源記」いずれにも描かれる桃は、仙界を想起させる植物である。また山は異界、川は境界と意識されることが多かった。六朝志怪で異界と接触するのは山や川で仕事をする漁師や樵夫であり、道に迷って異界にたどり着く。ちなみに日本の「こぶ取り爺」や、蒙古、朝鮮での類話の舞台も山である。こぶ取り話は浦島伝説と同じく異界訪問譚でもあるのだ。

近年、中国の洞庭湖を中心に伝わる「龍女説話」が注目された。話の展開が浦島伝説と酷似しているからだが、故郷との時間差が描かれる浦島伝説や「天台二女」と異なり、龍宮を訪ねた後に姫を連れて帰って妻にするケースがある点が興味深い。「龍女伝説」のような口承伝承の成立時期の特定は難しいが、日本の昔話との関係を検討する際は、中国の古典はもとより口承伝承や民話の存在も考慮するべきだろう。

QUESTION & ANSWER

江戸時代に学んだ漢籍

Q 江戸時代に、藩校で中国の古典を勉強していたといいますが、どのような書籍がどのように学ばれていたのでしょうか。

A 菊地隆雄きくちたかお

(元鶴見大学)

「弘道館」(水戸)や「日新館」(会津)など、二百を超える藩校の名称は、そのほとんどが「四書五経」に由来しています。藩校ごとに細かな違いはあるものの、儒学の「経書」、中でも「四書五経」が共通する基本的な教材でした。七・八歳〜十一歳ぐらいまでの間に『孝経』と「四書」の「素読」を、さらに十五歳ぐらいまでに「五経」の「素読」を仕上げます。

「素読」は、単に声を出して数回読んでみるという行為ではありません。まず師と子どもが机を挟んで対面して座ります。師が「字突き棒」で漢文を指して音読すると、それに子どもが付けて音読します。師は子どもが自分だけで読めるようになるまで、これを何度でも繰り返します。言わば子どもの能力に応じた完全な個別指導を施すわけです。子どもは読めるようになったら引き下がり、あとは暗誦して書けるようになるぐらいまで、ひたすら自分で音読を繰り返します。藩校に入校時の午前中の日課は、このようなものでした。一日百字ぐらいの

漢文の読みの音声が、こうして体の中に毎日沁み入り、いつの間にか基本的な書物が、まるごと自家薬籠中のものとなってゆきます。

漢文の作品の多くは「四書五経」を典故としているので、後々漢文を攻略する時に強力な武器となりました。また「四書五経」は見方によっては、森羅万象あらゆることを扱っていますから、これで人生観のみならず世界観をも形成されたのです。

「素読」が終了すると、次に師から「講釈」を受けます。これも多くの場合、個別指導で字句の意味や解釈が与えられます。

さらに進むと「会業」(グループ討論)が始まります。「会業」には「会説」と「輪講」があり、前者は多くの分量を読むことに重きがおかれ、『史記』などの史書や『唐宋八家文』『古文真宝』などの文章が主に扱われました。後者は経書を深くつきつめて討論するのが主でした。

では藩校では何のためにこのような教育を施したのでしょうか。表向きには有為な藩士を育てることが目的であったことは言うまでもありませんが、究極的には儒学の文言を体の隅々まで入れることによって、立派な「人間」を創ろうとしたのでしょう。

大修館書店 新課程教科書のご紹介

二〇二二年度から、
「古典A」・「古典B」は
「古典探究」へ。

二〇二二年度から、「言語文化」
翌二二三年度からは「古典探究」の授業が開始され、高校の古典学習は主にこの二つの科目で行われることとなります。
これまでの古典の授業とは何が違うのだろう、「探究」とは何をすればよいのだろう、と戸惑う先生方も多いのではないのでしょうか。

必修科目

つながる・広がる
古典の世界



『言語文化』
(言文 705)

選択科目



『古典探究 古文編・漢文編』

大修館書店の「古典探究」は、豊富な教材数と、随所にちりばめたコラムや課題などの仕掛けで古文・漢文を楽しく、主体的に学ぶことができる教科書です。定番教材で入試を見据えた授業を行うのはもちろん、複数の教材を読み比べて読解を深めたり、コラムや現代文を通して古典教材に興味を持たせ、自主的に学ぶ意欲を起こさせたりする工夫が満載です。

また、必修である「言語文化」にも複数教材の読み比べを通して、古典から現代へのつながりを意識させる工夫があります。大修館書店の「言語文化」「古典探究」で学ぶことで、古典と現代のつながりに自然に触れられ、普段の授業でも無理なく探究的な学習活動ができます。



『新編 現代の国語』
B5 判・238 ページ



『現代の国語』
A5 判・286 ページ



『新編 言語文化』
(言文 706)



『論理国語』
A5 判・438 ページ



『文学国語』
A5 判・454 ページ



『新編 文学国語』
A5 判・312 ページ



『新編 論理国語』
A5 判・330 ページ



『国語表現』
B5 判・252 ページ



『精選 古典探究』

大修館書店の「古典探究」

豊富な教材と資料で、
古文を主体的に楽しく
学ぶ教科書



教科書の特徴

①入試を見据えた読み比べ教材
読解を深めるための教材、「読み比べ」「視点」を新設。古文漢文だけでなく、近現代の文章も複数収録しました。複数の文章を読んで課題に取り組む共通テストなどの新傾向入試にも対応できます。



『古典探究 漢文編』
A5判・206ページ



『古典探究 古文編』
A5判・296ページ

『古典探究 古文編・漢文編』

充実の教材が176本！
古文、漢文だけでなく、
現代文の教材も多数収録して、
古文の読解を助けます。



②探究学習に取り組みやすい構成

「探究学習」を授業に取り入れやすくする、「探究」や「読み比べ」課題を新設しました。また、古文編巻頭には調べ学習などに役立つ「古典を探究」を設け、自主学習にも取り組みやすい構成になっています。

③疑問に答える充実のコラム

古文・漢文の基礎知識を読み物にまとめた「古文の窓」「漢文の窓」の他、高校生の素朴な疑問に答え、興味を引き出すコラム「豆知識」を設けました。高校生に勧めたい読書案内コーナーも随所に設けています。

④多彩な図版で理解促進

言葉では説明が難しい地理や人間関係が一目でわかる図版資料や、作品の読解に資する美術作品を多数掲載しています。

漢文付録の「諸子百家関係図」と「詩文関係図」はどこにもないオリジナル資料です！



読書コーナー「読んでみよう」で自分の興味を深めたり、探究学習に役立てたりできる本を紹介しています。

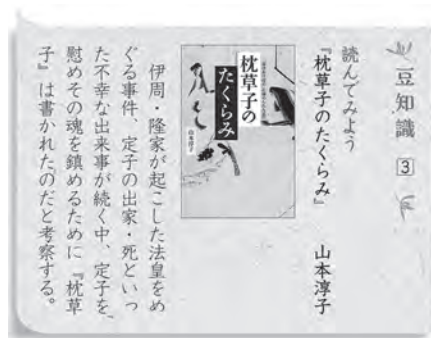


『精選古典探究』

A5判・408ページ

『精選 古典探究』

一冊でも充実の教材数。
古文、漢文だけでなく、
現代文の教材も収録して、
古文の読解を助けます。



漢 46p、精 240p

漢 51p、精 245p

①入試を見据えた読み比べ教材

漢文×現代文、古文×漢文、古文×古文
……など、さまざまな組み合わせで比べ読み。
教材の読解も深まります。

漢文教材だけでなく、古文や現代文もバラエティ豊かに収録しました。

現代の人気作家のエッセイや、江戸時代のパロディ物語を通して、古文を多様な視点で読み込みます。

古 14p、精 14p

古 16p、精 16p

掲載ページは全て『古典探究 古文編・漢文編』と『精選 古典探究』の共通教材です。

14 古本を採掘

15 古本を採掘

16 古本を採掘

17 古本を採掘

18 古本を採掘

19 古本を採掘

20 古本を採掘

21 古本を採掘

22 古本を採掘

23 古本を採掘

24 古本を採掘

25 古本を採掘

26 古本を採掘

27 古本を採掘

28 古本を採掘

29 古本を採掘

30 古本を採掘

31 古本を採掘

32 古本を採掘

33 古本を採掘

34 古本を採掘

35 古本を採掘

36 古本を採掘

37 古本を採掘

38 古本を採掘

39 古本を採掘

40 古本を採掘

41 古本を採掘

42 古本を採掘

43 古本を採掘

44 古本を採掘

45 古本を採掘

46 古本を採掘

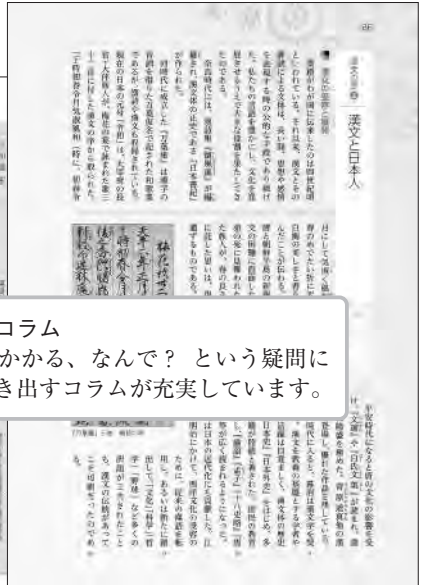
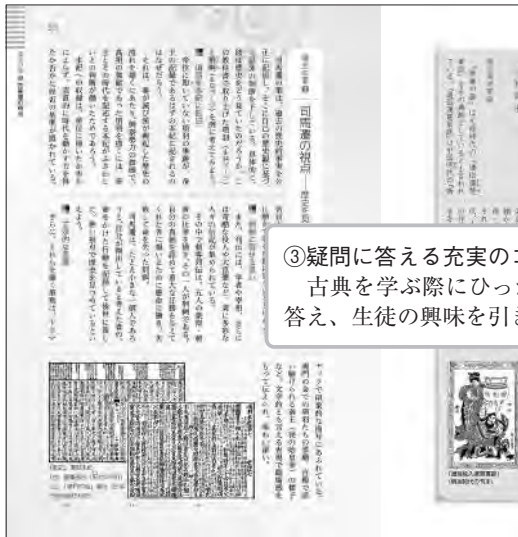
47 古本を採掘

48 古本を採掘

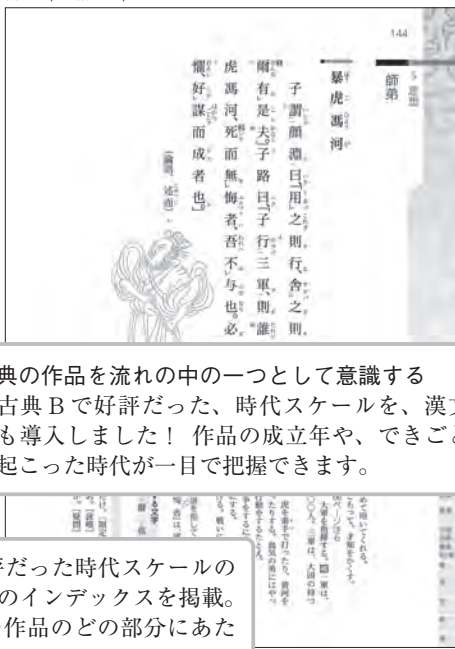
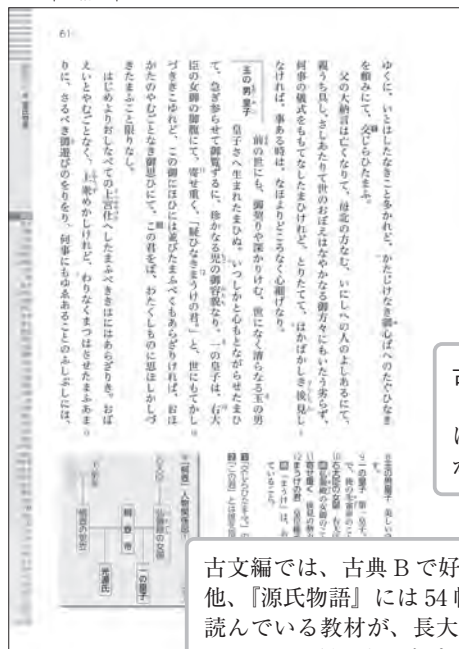
49 古本を採掘

漢 86p、精 276p

漢 55p、精 249p



掲載ページは全て『古典探究 古文編・漢文編』と『精選 古典探究』の共通教材です。



古典の作品の流れの中の一つとして意識する

古典 B で好評だった、時代スケールを、漢文にも導入しました！ 作品の成立年や、できごとが起こった時代が一目で把握できます。

古文編では、古典 B で好評だった時代スケールの他、『源氏物語』には 54 帖のインデックスを掲載。読んでいる教材が、長大な作品のどの部分にあたるのか、一目でわかります！

また、多くの人物が登場する作品には、人物関係図を掲載し、読解を助けます。

「文学国語」の教科書でも 古典が学べます！

小説や随想、評論だけでなく、古典の名作をコンパクトに味わえる「古典の世界」を設け、古典作品を 11 本収録。文学のすべてを一冊に盛り込みました。



『新編文学国語』
A5 判・312 ページ



『言語文化』



言文 705・A5 判
364 ページ

古典×現代、日本×外国、
縦横の視点で言葉と文化を考える。
思考力・表現力を養う。

- 1 漢文編収録教材
私たちと漢文
論語／孟子
- 2 蛇足／完璧／鶏鳴狗盜／
臥薪嘗胆
- 3 静夜思／江雪／山行／贈汪倫
送元二使安西／過故人莊
涼州詞／月夜／香炉峰下…
- 4 雑説／黔之驢／人面桃花



作品の舞台がイメージしづらい漢文も、
地図や図版を多数掲載して
読解に役立つように工夫しました。



漢文と現代日本語をつなげる工夫が満載。
漢文学習への意欲を高めます。

大判の紙面で図版資料を豊富に掲載。
楽しみながら「言語文化」の
つながりや広がりが実感できる。



言文 706・B5 判
312 ページ

『新編 言語文化』

- 漢文編収録教材
- 1 訓読のきまり
- 格言／再読文字
- 2 守株／五十歩百歩
- 蛇足／借虎威
- 3 論語
- 完璧／鶏鳴狗盗
- 人面桃花
- 詩歌の調べ
- 春望／春曉／静夜思／山行
- 江雪／和漢朗詠集

日本の漢詩も掲載

題自画
唐詩読
午院沈
借問春
石前蘭
竹石
間有
蘭



漢文の入門単位では、生徒がつまずき
やすい訓読の基本を徹底解説。
教科書一冊で、漢文を読むためのポイ
ントを網羅しています。

『国語教室』208号でも、「古典探究」を含めた
2023年度使用開始の教科書をご紹介します。
ぜひご覧ください。

web 連動—漢字文化資料館

中国詩人たちの被り物

板倉 いたくら
聖哲 まさあき

中国詩人の顔というと、文学全集や歴史書の挿図にあるものがすぐに想起されるのではないだろうか。これらのイメージは現在の我々の中で結構定着しているようだが、それらを見ると、詩人の顔の群は実はどれもかなり似通っており、そのほとんどは明時代以降の版本の図像に基づいたものである。詩人たちの容貌が似通っていても見分けがつくとすれば、仕草・持物などで表すことが容易に想像されるが、それを示す最も重要なアイテムの一つが巾・帽といった被り物なのである。

中国の山水画にはしばしば文人高士が登場しているが、それが誰を表したもののか、もしくは誰かを意識しているのかわからないように見える。実は題名が山水画とされているものの中にも、画中人物が誰であるかを明確に意識したものが少なからず含まれており、制作者と鑑賞者の間で共有されていると考えられるものもある。

蘇軾の東坡巾

東京大学東洋文化研究所教授。研究領域は中国を中心とした東アジア絵画史。『日本美術全集第6巻 東アジアの中の日本美術』（共著、小学館、二〇一五）『典雅と奇想 明末清初の中国名画』（共著、東京美術、二〇一七）ほか、論著・論述多数。

最も代表的なものは何といっても北宋のマルチ文人、蘇軾（そしき）（字は子瞻（しぜん）、号は東坡居士（とうはこじ）、一〇六〇～一一二六）の被り物「東坡巾」である。蘇軾は進士（科挙合格者）たちを中心とする士大夫階層が担い手となった北宋時代後期の新たな文化活動の隆盛を象徴する人物。その思想的な輪郭は実に広大であり、偉大な文学者として多くの著述を遺している。のみならず、書・画・音楽・庭園・食物など趣味的なものに通暁しており、特に詩書画及びそれらの批評において後世に与えた影響は甚大で、万能の芸術家と呼ぶに相応しい。

東坡巾とは「烏角巾」とも言われ、短くて四角い頭巾のこと。明・王圻の『三才図会』（一六〇七年序）「衣服一卷」（図1）には、この形態の中は唐宋五代まで遡るとされ（高装巾）、蘇軾による改良を経た後、この名前が定着したという。北宋・李廌（りてい）（一〇五九～一一〇九）『師友談記』には「士大夫近年倣東坡、桶高簷短、名帽曰子瞻様」（士大夫は最近東坡を真似て、



図2 元・趙孟頫「蘇東坡小像」(台北・國立故宮博物院「行書赤壁二賦冊」の内)

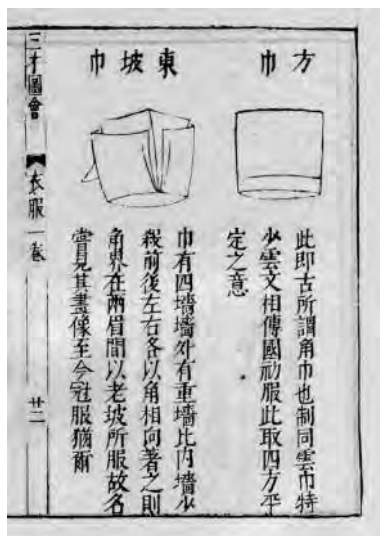


図1 明・王圻『三才圖會』東坡巾

桶は高くひさは短く、この形の被り物を子瞻様と呼んだ」とあり、それをからかったような寸劇が皇帝や蘇軾の目の前で演じられたことも記されている。つまり、蘇軾がこの巾を好んで着けたことはほぼ同時代からよく知られており、早くから蘇軾のトレードマークのように理解されていた。元時代

初期の文人画家、趙孟頫(三番三三)の画いた「蘇東坡小像」(台北・國立故宮博物院 図2)は後世の典型的なイメージを示しているが、ここには東坡巾を被った、眼光鋭い容貌の蘇軾が立ち姿で描かれている。口髭と顎髭を蓄え、長い竹杖を手にするのも「蘇軾像」には度々見られる。

蘇軾を中心とした文人ネットワークを象徴する宴がある。「西園雅集」は元豊年間もしくは元祐の初め頃、宗室の王誥(わこう)が主催した西園での宴遊のことで、蘇軾・蘇門四学士・李公麟(りこう)・米芾(まいへい)ら十六名が参会し、李公麟が着色の背景の中にその様を描き、米芾が「西園雅集図記」を作り書いたという。ただし、この宴遊については多くの文人たちが実在か虚構かを議論し続けており、近年では各文集などの記述からして、実際には十六名全員が集まることはほぼ不可能であることが確認されている。この雅集はその実在・虚構にかかわらず、南宋時代以降の中国で流行し、さらに韓国・日本の知識人たちの憧れとして広く知られ、東アジアにおいて多くの書画作品が生み出された。「西園雅集」の多くの図様は米芾作とされる記の通り、筆を執って書く蘇軾、画を描く李公麟などが登場するが、ここには東坡巾を着けた者が二人登場する。蘇軾本人と弟の蘇轍(そく)であり、文人たちの集いの中にあっても二人の姿は一目見てわかる程はつきりしている。

陶淵明の葛巾

もう一人、陶淵明（三六五～四二七）の被り物が挙げられる。陶淵明は「古今隱逸詩人の宗」（梁・鍾嶸（？～五二〇）『詩品』）と言われる。名は潜、淵明は字。一説に名は淵明、字は元亮。陶淵明の詩は百余首、散文は十数篇が伝わり、「帰去来辞」や「桃花源記」などが有名である。同時代の評価はそれほどではなかったが、唐以後は、田園詩の創始者、六朝最大の詩人としてよく知られるようになった。日本でも最も愛読されている中国詩人の一人である。

東アジアにおける陶淵明図像は極めて多く、様々な画題が定着しており、陶淵明の仕草として「採菊」「対南山」「種五柳」「醉石」「臥眠」「漉酒」等が挙げられる。その中にある「漉酒葛巾」という故事は、梁・蕭統の「陶淵明伝」には「郡將嘗て之を候うに、其の釀の熟するに値うや、頭上の葛巾を取りて酒を漉し、漉し畢るや、還た復び之を著く」とあり、その成立もかなり早かったと考えられる。葛巾を用いて酒を搾り、終われば又着けた、というのだ。（伝）唐・陸渾「六逸図卷」（北京故宮博物院）は、漢晋の六人の逸人を画いたものだが、ここに陶潜が登場し「葛巾漉酒」の主題が選択されている。この画題は描き継がれ、元・（伝）朱德潤「陶淵明図卷」（個人蔵）第6図、明・李宗謨「陶淵明事蹟図卷」（大和文華館）第4図など彼をめぐる故事の中でも重視されており、単独の画題としても明・丁雲鵬「漉酒図」（上



図3 南宋・梁楷（款）「東籬高士図」（台北・國立故宮博物院）

海博物館）が挙げられる。彼の被った頭巾は葛布で作られ、中に長紐が付いており、この中は彼の愛した菊の花や六朝風の羽扇と共に陶淵明のトレードマークのような効果を果たしているのである。そうした意味で、南宋時代の画院画家、梁楷の落款が入った「東籬高士図」（台北・國立故宮博物院 図3）は最も典型的な陶淵明像と見なすことができる。

南宋時代を代表する画院画家、馬遠の「松溪觀鹿図（扇）」（クリーヴランド美術館 図4）は基本的に南宋時代に流行した対角線構図を採り、主要モチーフは右下方に寄せられている。一人の高士は我々鑑賞者に背を向け、画面左方に視線をやっている。天蓋のように伸びる柏樹、奥行を強調するように画面右方、その奥に樹叢が淡墨で表されている。視線



図4 南宋・馬遠「松溪觀鹿圖(团扇)」(クリーヴランド美術館)

の先は茫漠とした空間が広がっているが、画面左端には水を飲みに来た鹿の親子が現れている。この团扇の題名に陶淵明の名は見えないが、典型的な葛巾から陶淵明のイメージが意識されていることがわかる。陶淵明詩中に親子の鹿を見遣る詩は管見の限り見当たらないが、この高士の描写が宋時代ではなく六朝時代の文人の姿を意識したものであることは確かである。

一見してわかる、この二つのトレードマークは、東アジアにおける詩書画の制作者と鑑賞者の間で共有されてきた。こ

れらを見分けることで、代表的な中国詩人である蘇軾と陶淵明のイメージは、東アジアの絵画の中、画題にその名前がなくともさまざまなところに存在していることを確認できるのである。

主要参考文献

- ・『淵明逸致特展図録』 台北故宮博物院 一九八
- ・救仁郷秀明「日本における蘇軾像―東京国立博物館保管の模本を中心とする資料紹介」『MUSEUM』494号 東京国立博物館 一九三
- ・救仁郷秀明「日本における蘇軾像(二)―中世における画題展開」『MUSEUM』545号 東京国立博物館 一九六
- ・拙稿「馬遠『西園雅集図巻』(ネルソン・アトキンス美術館)の史的位置―虚構としての『西園雅集』とその絵画化をめぐる」『美術史論叢』16号 一九九
- ・拙稿「描かれた蘇軾の姿―重ねられた陶淵明像」『S』85号「あなたは誰か―肖像とロウ人形」ポラ文化研究所 二〇〇一
- ・『文学名著と美術特展』図録 台北故宮博物院 二〇〇一
- ・救仁郷秀明「日本中世絵画における陶淵明と蘇軾」『東京国立博物館紀要』38号 東京国立博物館 二〇〇三
- ・袁行霈『陶淵明影像―文学史与絵画史之交叉研究』中華書局 二〇〇九

二〇二二年度大学入学共通テスト

「国語」漢文の分析と指導

北澤 紘 一
(代々木ゼミナール)

概要

二〇二二年度大学入学共通テスト「国語」漢文は、清の阮元^{げん}の【詩】とその【序文】(『擘經室集』所収)からの出題である。阮元(一七六四～一八四九)、字は伯元^{はくげん}、号は芸台^{げんたい}等、諡^{ふんたう}は文達、中国清朝中後期の政治家・学者である。政治家としては地方大官を歴任し、各地に学校を建てて学問を振興した。学者としては清朝考証学の集大成者の一人であり、彼が校勘記を書いて出版した『十三經注疏』(儒家が重視する十三種の経書及びその注釈)・清初から彼の時代までの経学研究書を集成した『皇清經解』^{こうせいけいかい}は、現在でも中国哲学研究者に参照されている。『擘經室集』は阮元の詩文集である。

二〇年度センター試験、二一年度共通テストに引き続き漢詩が出題された。複数問題文は、試行調査・前年度から引き継がれており、現時点で共通テストの特徴となっている。本文の字数は【序文】が一四九字、【詩】が五六字で、前年度より二九字増加した。設問数は七問、マーク数は九箇所、

設問数が前年度より一つ増加、マーク数は同じであった。【詩】が難解であるが、珍しい蝶の出現と筆者との関わりは、【序文】の方にすべて示されている。問6・問7は、設問文上【詩】と【序文】とにまたがる形式になってはいるが、【序文】の内容を正しく読み取ることができれば解答できる。漢詩と散文とが出題された場合、漢詩がよく分からなくても、落ち着いて散文の方から内容を理解するように指導したい。問題文の長さ・内容、設問で問われている知識・内容・難易度は標準的であり、センター試験や前年度と変わりはない。

設問の解説

【問1】波線部ア「復」・イ「審」・ウ「得」の意味問題

設問文で「ここでの意味として最も適当なもの」が求められている。漢字の意味問題は、共通テストでは初出題であるが、センター試験ではしばしば出題されていた。ア「復」・イ「審」では漢字の知識が、ウ「得」では文脈に合う意味が求められている。

確認する必要はない。

傍線部に含まれている重要漢字「有」「者」に注目してほしい。「有―者」は、「有―者―」「有―者―」のように返り点が付き、「―する者有り」と読む。この形に読めている選択肢は②③④である。このうち②は「余の園の者」（私の庭園の者?）、③は「之を匣に入れ呼び」という部分がおかしい。「呼^ビ之^ヲ入^レ匣^ニ」のように動詞から動詞に返って読むことはない。④「客に之を呼びて匣に入れ奉じて余の園に帰さんとする者有り」（客に蝶を呼びよせて箱に入れ、私の庭園に持ち帰ろうとする者がいた）が正解。漢文文法の習得が、いわゆる句形だけに限定されてしまうと、本問のようなわかりやすい句形を含まない傍線部に苦戦することになる。「有」も「者」も頻出漢字である。句形を構成しない漢字も正しく指導したい。

【問3】傍線部Bの解釈問題

「苟^コ」は、「苟^コ―」「苟^コ―」（もし―ならば、「苟^{クモ}―」「苟^{クモ}―」（もし―としても）という条件節を作る。（条件節を作らず「かりそめに・いい加減に」という意味のものもある。）この知識から、④「もし私に近づいてくれたとしても」、⑤「もしも私に近づいてくれたならば」に絞ることができる。

「当」は、「まさニ―スベシ」（―しなければならぬ・きつと―だろう）という再読文字の用法を持つ。傍線部後半の解

釈として⑤「必ずおまえを絵に描いてやろう」は認められるが、④「どうしておまえを絵に描けただろうか」は明らかに誤りである。傍線部は「苟くも我に近づかば、我当に之を図くべし」と読む。文脈から絞り込むこともできる選択肢構成であったため、正答率は高かった。

【問4】空欄補充と漢詩の説明問題

漢詩句末の空欄補充問題は、二〇年度センター試験、前年度に引き続き三年連続の出題である。まず押韻で選択肢を絞る。絶句・律詩・排律といった近体詩では、五言詩であれば偶数句末、七言詩であれば基本的に第一句末十偶数句末で押韻する。（古詩もこれに準ずるものと考えてよい。）押韻しているかどうかは、漢字の音読みの母音部分で判断する。第二句末空欄□を除いた第一句末十偶数句末の漢字は、「多」ㄊ・「何」ka・「羅」ra・「過」kaと、母音部分はすべてaになっている。①「座」za・②「舞」bu・③「歌」ka・④「少」shou・⑤「香」kouで母音部分がaになっているのは、①「座」・③「歌」である。「香」を「か」と読むのは訓読みであり、音読みは「コウ」である。次に選択肢後半【詩】の説明部分である。この【詩】は、一句七文字、全八句で構成された七言律詩である。①「起承転結で構成された七言絶句」は誤り。③「頷^{ぐん}聯^{れん}と頸^{けい}聯^{れん}がそれぞれ対句になった七言律詩」が正解。⑤を選んでしまった受験生が多く、正答率が低かつ

た。選択肢後半の「第一句末と偶数句末に押韻する七言律詩」という部分は合っている。こちらを先に見て先入観をもってしまうと、誤答につながる。漢詩句末の空欄補充は、まず押韻から入るように指導したい。

【問5】傍線部Cの読み方問題

返り点が付けられた傍線部の読みを問う問題である。共通テストでは初出題だが、センター試験では普通この形式の場合、すべての選択肢が返り点の順番通りになっていた。

「奈何・如何・若何」(どうしたらよいか・どうしたらよいか、いやどうしようもない)が、間に目的語を挟んだ「奈何何」(「フいかんセン」の句形知識で即答できる。項王の最期・垓下の歌の末尾「奈何何」が有名である。⑤「はるをいせんせん」が正解。正答率は高かった。「過ぎ行く」春をどうしようもない」という意味である。

【問6】出来事の順序を問う問題

蝶が現れたり、とまったりした場所とその順序を問う問題である。センター試験に同じ問題はなく、新傾向の問題と言ってよい。設問文には【詩】と【序文】に描かれたとあるが、解答に必要なのは【序文】の理解だけである。

【序文】で蝶の登場箇所を見ていくと、「異蝶の園中に来たる有り」(阮元の庭園)↓「扇に落つ」(扇)↓「之を瓜爾佳氏の園中に見る」(瓜爾佳氏の庭園)↓「余の園の台上に見る」(阮元の庭園の台)↓「蝶其の袖に落ち」(袖)となっており、

⑤「扇―阮元の庭園の台―袖」が正解。①②③に含まれる「春の城」「画家の家」「董思翁の家」は登場しない。全体の見直しが必要であり、解答に時間がかかった受験生が多かった。

【問7】筆者の心情説明問題

【詩】と【序文】から読み取れる筆者の心情の説明」を求める問題である。実は【序文】だけで解答できるが、難解な【詩】が付いているので、消去法に頼らざるを得ないものと思う。①「董思翁の家」・②「扇から抜け出し庭園に現れた不思議な蝶」・③「董思翁の夢を扇に描き」・④「人に奪われてしまい」が誤り。⑤が正解。

予想と対策

試行調査・二年分の問題から、今後も複数の問題文が提示されるものと予想される(二一年度第2日程・二二年度追試では設問中に別の漢文が示された)。ただし、問題文が複数になったからといって、特別な読み方・解き方を必要とするものではない。設問は、形式・内容・難易度にわたり従来のセンター試験と大きな差異はないが、二年分を見る限り、知識で即答できる問題が増加傾向にある。漢文に由来しわが国の言語文化を形成する漢字・語句・定型表現(句形)・漢詩・故事成語等の正確な知識、読み・意味を覚えるだけではなく用法にまで踏み込んだ正しい理解、(選択肢を使って解答するテクニクではなく)自力で本文を読解する力が重要である。

漢文に興味をもたせる 漢詩指導の一方略

(岩手大学教育学部附属中学校)

鈴木駿

1 授業のねらい

近年は「Social」の時代を迎えるにあたり、教育現場においてもICTの重要性が説かれる時代です。そのような時代の流れにあつて大切なのは、どのように、どのような言語力を学習者に獲得させていくか、なのではないでしょうか。豊富な語彙や磨かれた表現力は学習者のこれからの社会を生き抜く上での大切な素養となると考えます。そのためにも磨き抜かれた表現が印象的な漢文や漢詩は非常に魅力的な学習材に見えます。しかし一方で、中学生にとって漢文や漢詩は「読みづらいもの」「難しいもの」という印象が強いようです。本校の学習者は学習への興味関心が強い傾向にあります。今回行った単元前のアンケートでは漢詩が「面白そうだ」と答えた学習者はわずか3%でした。どうしても読みづらさに抵抗を感じている学習者が多くいるようです。高校入学後は中学校段階で学ぶよりもより高度な作品と多く出会いま

す。このまま高校へ進学すれば、漢文アレルギーを抱えたまま授業に臨んでしまう……。なんとかしなければならない！という危機感をもつて今回の単元を構想しました。漢文は楽しいものだ！と思わせるためにはどうすれば良いのだろうか……。私自身の反省ですが、これまでの授業は訓読の方法や漢詩の形式、押韻や対句などといった学習事項を押さえるのみといった授業が多かったように思います。そこで、今回は漢詩を学ぶ意義に気付かせつつも、学習者自らの言語生活を振り返り、今後の言語表現に生かしていく態度を養うことをねらいにしています。

2 授業の実際

【一時間目】杜甫はなぜ「然(燃)」という漢字を使ったのだろうか？

今回用いる作品は杜甫「絶句」です。展開の前半では承句を「山青花欲□」としたものを学習者に提示し、空欄にふさわしい漢字は何かを考えさせました。その際、描

かれている情景を想像させたり、他の言葉に着目させたり、他の句と比較させたりしながら、これまでに学んできた言葉による見方や考え方を働かせ、言葉を巧みに操る作者の表現の工夫に迫らせました。どのような漢字が用いられているのかを考えていく中で対比や詩の構成を意識しながら読む姿勢を養うとともに、どんな情景が描かれているのかを考えさせました。

T…空欄に当てはまる漢字は何でしょう？どんな視点をもって考えてみればいいかな。

S1…「赤」だと思います。他に「碧」「白」「青」など、色を表す漢字が使われているからです。

T…対句的な表現に着目したんだね。対句的な表現に着目すると他にはどのような漢字が当てはまるかな。

S2…私は「紅」にしました。「赤」よりも、より深みが増す気がします。

作者は緑も「碧」と表現しています。S2…私は情景に着目して「鮮」だと思いました。色ばかりでは表現が単調でつまらないです。自然が生き生きしている様子を表そうとしたので

はないかと考えました。

T…なるほど、情景に着目するののも面白いね。どんな様子で咲いてたのだろう。

S2…実は、「光」という漢字も考えていました。

S3…「別」ではないかと思えます。詩の後半では「帰」という言葉が使われているので、作者の心情は暗いのではないかと考えました。明るい表現は使わないと思います。

T…詩全体の構成と、作者の心情に着目するのは、以前の学習でも学んでいますね。

展開の後半では、空欄になっている漢字は直接的に色を表現している漢字ではなく、「燃」という漢字であるということを確認しました。これは、単なる赤色とは異なり、燃えるように鮮やかな赤色を表現するため、さらには後半の作者自身の虚しさとの対比をより鮮明に描くために作者が選んだ言葉です。なぜ「燃」という漢字を作者が使ったのか、その真意を考えさせることで作者の表現の工夫に迫りました。まとめでは、作者の言葉による見方や考え方を踏ま

えつつ、自分の考えた漢字との比較をさせるとともに、今後どのように学習を進めていきたいかを書かせました。

【二時間目】押韻がもたらす効果とは？

一時間目で考えた「燃」という漢字が使われた意図が、漢字の本来持つている意味の他に、押韻のルールにあることを学んできます。実は押韻は日常の生活においてもよく使われている表現技法であることを学習者に投げかけ、どのような場面を押韻が生かされているか考えさせました。すると、「ラップ」や「J-pop」など、学習者が普段親しんでいるものが挙げられました。ここでは実際に学習者が知っている曲を聴き、押韻がもたらすものは何かを考え、リズムを生み出したり、主題に迫る語句の強調の効果などを押さえさせたりしました。また、「世界に一つだけの花」を中国語、英語の歌詞をつけて聞かせ、押韻が日本だけでなく、中国語や英語においても使われることを確認する時間になりました。

【三時間目】杜甫はなぜ故郷に帰れ（ら）なかったのか？

杜甫がなぜ故郷に帰ることができなかったのかを考える時間です。あえて学習者に

は何の情報も与えず、あくまでも自分の予想として考えさせました。その答えにたどり着くためには中国の歴史的背景を押さえる必要性があることに気付かせ、学習者に当時の歴史的背景や杜甫の人生についての情報を提示しました。授業の終わりには、教師が示した九つの漢詩の中から鑑賞文を書くために一つ選ばせました。提示した漢詩は以下の作品です。

- ①涼州詞 王翰 ②送元二使安西 王維 ③黃鶴樓送孟浩然之廣陵 李白 ④江雪 柳宗元 ⑤靜夜思 李白 ⑥香燭峰下新卜山居草堂初成偶題東壁 白居易 ⑦春望 杜甫 ⑧七步詩 曹植 ⑨哭晁卿衡 李白

【四時間目】選んだ漢詩を鑑賞しよう

前時に選んだ漢詩を個人で鑑賞させました。はじめに漢詩を鑑賞する視点について考えさせました。これまで学習者は短歌の鑑賞も行っており、三時間目までに学習した内容と合わせて振り返りました。①情景②作者の心情③押韻④対句などの表現技法⑤構成⑥漢字の意味などを吟味することを確認して鑑賞を行いました。

【五時間目】鑑賞文を書こう

それぞれの学習者が前時に鑑賞した内容をもとに、鑑賞文を書かせました。

【六時間目】漢詩の魅力とは何だろうか？
それぞれが書いた鑑賞文をグループで読み合い、交流を行いました。学習者はお互いの鑑賞文を①情景が浮かぶ作品か②作者の心情が伝わってくる作品か③作者の表現の工夫がわかる作品か④読んで納得できる作品か⑤その漢詩の魅力が伝わってくる



か、といった観点で評価をしました。その後、漢詩の魅力とは何かを考え、学級全体で交流し、最後に単元のとめを行いました。
3 学習者の反応 まとめ

今回の実践を行った後のアンケートでは、大半の学習者が漢詩に対して肯定的に捉えるように変化していました(「面白かった」97%)。また、「漢詩に対してどのようなイメージを持ちましたか？」という問いに対し、ある学習者は「漢詩は普通の文章に比べて、凝縮された文章である」と思っています。作る側も読む側も文章が濃いために難

しいと感じますが、濃いからこそ深い読みができるし、他の人との解釈を比較し、「確かにそうだな」と納得できるところに楽しさがあります。」と振り返りました。漢詩のもつ面白さや価値に気付く、主体的に鑑賞を行おうと学習に取り組む学習者が他にも多く見られ、概ね単元のねらいに迫ることはできたと感じています。

この漢詩の実践から、次年度に行った「論語」や「故郷」など、中国の古典や文学、あるいは漢字そのものにより親しむ学習者が育めたと感じます。学習者が主体的に漢

詩や漢文に取り組むためには、その作品そのものの本質的な面白さに気づかせることが何より重要だということです。今後もしこういった実践を行い、漢詩や漢文に親しむ学習者を育てることができればと思っています。

単元学習シート	
漢詩の風景を味わおう	
2年 1組 書 氏名	
単元1時間目 漢詩の風景を味わおう	単元最終時間 漢詩の風景を味わおう
学習目標 漢詩の風景を味わおう	単元の目標 漢詩の風景を味わおう
学習内容 漢詩の風景を味わおう	単元の流れ 漢詩の風景を味わおう
単元後 漢詩の風景を味わおう	漢詩の風景を味わおう 漢詩の風景を味わおう